

結果、多肥のNa4は少肥のNa1に比べて、葉ではP(+26%)、Ca(+17%)が多く、果実ではP(+24%)が多かった。

以上から、夏秋キュウリの施肥量は、この供試土壌条件においては、10a当たり堆肥3tを施し、基肥に緩効性複合肥料を用い、N30kg、P₂O₅20kg、K₂O30kgで、整枝をしない放任栽培でも9tの収量が得られ、慣行多肥整枝栽培に劣らないことがわかった。

しかし、実際の現地での施肥設計に当たっては、地質、肥よく度により、できるならば土壌分析のうえ決定するのが望ましく、土壌によっては有機質の増施、Kの減量、Mg、Caの増施など土壌改良を充分考慮する必要がある。また、慣行多肥は少雨の年や3年連作時には土壌中の肥料濃度が高まり、生育障害を生じやすい条件にあると考える。

夏秋キュウリの摘葉に関する試験

小原 房雄・中村 正輝・小野 公二

(岩手県園芸試験場)

1 ま え が き

夏秋キュウリの栽培管理のなかで、側枝の摘心や摘葉に作業労力を多く要している。摘葉は、合掌内部への光線透過をよくし、側枝の発育をよくするとともに成戻りを図り、着果数の増加による多収を期待するたに行われ、なかには一時に多量の摘葉をする例も見られ、収量、品質が低下している傾向もある。ここでは摘葉の程度と時期が、生育・収量・品質に及ぼす影響を知るため、昭和47年～48年に試験した結果につき報告する。

2 試 験 方 法

第1, 2表に示す。

1 品種 ときわ北星号

2 は種期 6月1日

3 栽植距離 支柱幅210cm, 条間75cm, 株間60cm, 10a当たり1,170株

4 整枝法 親, 子蔓, 2本仕立, 各35節摘心で側枝は2節で摘心し8月15日以降は側枝の摘心を行わない。

5 施肥量 元肥, 堆肥4,000kg, 炭カル150kg, N

-15kg, P₂O₅-27kg, K₂O15kg追肥, N-28.8kg, K₂O-28.8kg

6 1区面積及び区制 1区4.27m², 2区制

第1表 試験方法

年度別	摘 葉 方 法 (1回当り)	
47年	親 蔓	2葉 4葉 6葉
	親+子蔓	2葉 4葉 6葉
	親+子蔓慣行	(下葉5枚のみ摘葉)
48年	は種後50日以降親+子蔓	2葉 4葉
	" 65日以降	2葉 4葉
	親+子蔓慣行	(下葉5枚のみ摘葉)

7 摘葉始と摘葉量 試験年度により、異なるが、下葉5枚摘葉以降、下位葉から、摘葉を始め昭和47年度は、は種後42日目の7月12日から摘葉始め、親蔓摘葉区の総摘葉量24葉、親+子蔓の摘葉区は、親蔓24葉、親+子蔓24葉計48葉摘葉として比較した。

昭和48年度は、摘葉開始時期をは種後50日以降と65日以降に分け、親蔓20葉、子蔓20葉、計40葉とし比較し、摘葉月日は第2表のとおりである。

第2表 摘葉日(48年度)

試 験 区	摘 葉 月 日		回 数	摘葉数
50日以降2葉	7/20, 22, 23, 24, 26, 28, 30	8/1, 3, 5, 7	10	40枚
" 4 "	7/20, 24, 28	8/1, 5	5	"
65日以降2 "	8/5, 7, 9, 11, 13, 15, 17, 19, 21, 23		10	"
" 4 "	8/5, 9, 13, 17, 21		5	"
慣 行 区	下葉5葉のみ		—	—

3 試験結果及び考察

初期生育はいずれの年度も良好であったが昭和47年度は、9月16日～17日にかけ台風の被害を受け、9月15日で調査打ち切りとしたため低収である。また昭和48年度は6月中旬からの異常早ばつの年であり、平年に比べ、葉も小葉で経過した。

1 生育 摘葉以降初期生育は、試験区間の差はほとんど見られないが、8月上旬からは摘葉区は、下葉位からの成葉が摘葉されるためと思われるが、草丈が低く、最大葉も小さく、摘葉量を増すほど生育抑制の傾向を示した。慣行区の生育は旺盛であった(第3表)。

第3表 生 育 (47年)

調査日	試験区	項 目	節 数	草 丈	平均節間長	最 大 葉		
						長 さ	幅	長さ×幅
8月1日	親 2 葉		20.7 ^節	151.5 ^{cm}	7.32 ^{cm}	26.5 ^{cm}	25.9 ^{cm}	686 ^{cm²}
	親 4 葉		19.4	131.5	6.78	24.2	24.2	586
	親 6 葉		20.9	121.6	5.82	23.1	25.5	589
	親 + 子 2 葉		19.6	135.9	6.93	23.6	23.7	559
	親 + 子 4 葉		21.1	133.6	6.33	23.7	23.6	559
	親 + 子 6 葉		19.9	131.5	6.61	22.9	22.9	511
	慣 行		17.3	120.0	6.94	24.0	23.3	559
9月5日	親 2 葉		33.8	259.0	7.7	32.3	31.9	1,034
	親 4 葉		34.3	249.0	7.26	31.2	31.8	992
	親 6 葉		34.3	232.0	6.76	29.9	29.9	894
	親 + 子 2 葉		33.5	227.0	6.78	31.4	31.1	977
	親 + 子 4 葉		33.6	223.0	6.64	30.6	30.3	927
	親 + 子 6 葉		34.0	220.0	6.47	30.0	31.0	910
	慣 行		33.2	275.0	8.28	34.4	32.2	1,108

2 収量 1果平均100～120gで、収穫し、収穫本数で収量値を示しているが、昭和47年、48年とも、慣行区に比べ摘葉区の収量が少なく摘葉量を増すほど

収量が低下し、摘葉時期が早まるほど低収となり、慣行区が多収となった(第4、5表)。

第4表 収 量

(10株当たり)

試験区	項 目	収穫本数	良 果	曲 果	く ず 果	10a当り収量(良+曲)
47年	親 2 葉	533	237 ^本	190 ^本	106 ^本	52,692 ^本
	親 4 葉	405	161	138	106	36,897
	親 6 葉	389	161	152	76	38,624
	親 + 子 2 葉	379	150	151	78	37,146
	親 + 子 4 葉	364	130	136	98	32,824
	親 + 子 6 葉	310	111	117	182	28,135
	慣 行	596	279	210	107	60,343
48年	50日以降2葉	766	354	284	128	78,729
	" 4 "	738	327	262	149	72,683
	65日以降2葉	919	413	359	147	95,265
	" 4 "	936	410	359	167	94,895
	慣 行	1,012	472	382	158	105,384

第5表 収 穫 率

(%)

試験区	項 目	合 計 本 数	良十曲 本 数	割 合		
				良 果	曲 果	く ず 果
47年	親 2 葉	87.3	87.3	44.5	35.6	19.9
	親 4 葉	61.1	61.2	39.7	34.1	26.2
	親 6 葉	64.0	64.0	41.3	39.2	19.5
	親 + 子 2 葉	61.6	61.6	39.6	39.8	20.6
	親 + 子 4 葉	54.4	54.4	35.7	37.4	26.9
	親 + 子 6 葉	46.7	46.6	35.8	37.8	26.4
	慣 行	100	100	47.0	35.0	18.0
48年	50日以降 2 葉	74.7	74.7	46.2	37.1	16.7
	" 4 "	69.0	69.0	44.3	35.5	20.2
	65日以降 2 葉	90.0	90.4	44.9	39.1	16.0
	" 4 "	90.0	90.1	43.8	38.4	17.8
	慣 行	100	100	46.7	37.7	15.6

3 品質 摘葉量を増すほど良果率が低下し、曲果、くず果が増加する傾向が見られた。また、摘葉時期が早まるほど、曲果、くず果が増加する傾向を示した。慣行区は良果率が高く、くず果率が低い。

4 摘葉別による果色の差や、開花後収穫までの日数、病害の発生程度などにつき観察したが、ほとんど差は認められなかった。

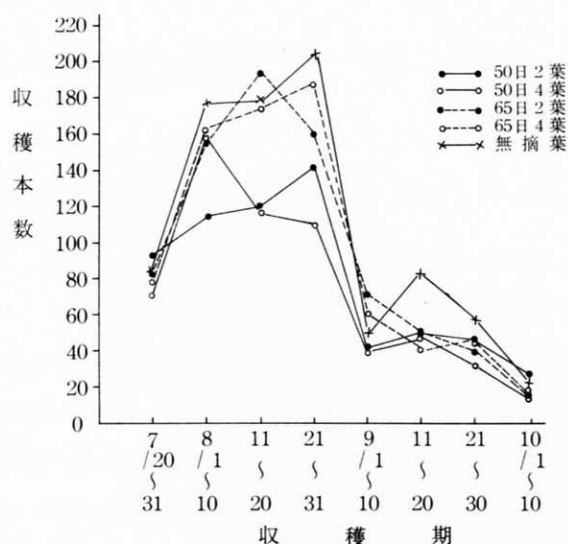
5 時期別収量 摘葉別による収穫始めや初期収量はほとんどないが、8月上旬からの収量差が大きく、

収穫最盛期(8月中旬～9月上旬)では摘葉量が多く、摘葉時期が早いほど低収となり、摘葉終了後の後期収量も少なく後期収量に影響する傾向を示し、慣行区が全期間に多収となった(第1図)。

4 む す び

摘葉することにより、生育抑制の傾向が見られ、摘葉の時期が早く摘葉量が多いほど収量が低下し、曲果やくず果が多くなる傾向から、この試験結果では摘葉による、生育・収量・品質、更に後期収量(9月)に及ぼす成戻り現象などについて効果はほとんど期待できない結果となった。また摘葉労力を考慮すると省力とならないものと思われる。

以上の結果から摘葉は、普通の生育状態では、生育・収量・品質に悪影響を及ぼすと思われる病葉や枯葉の摘葉程度にとどめる必要がある。なお前進栽培・密植栽培・多肥栽培等による過繁茂時など、一時生育抑制するための摘葉については、再検討の必要があるものと思われる。



第1図 時期別収量(48年, 10株当たり)